

松岡 勲の読書 or 映画案内（2）

ウクライナ映画「ドンバス」「アトランティス」「リフレクション」

ロシアのウクライナ侵攻が始まって半年あまりが過ぎ、その戦争の悲惨な実態が報道され、心が痛む。ウクライナの現場からその厳しい実態を告発した映画が公開されている。続けてセルゲイ・ロズニツァ、ヴァレンチン・ヴァジャノヴィチの作品を3本見たので、紹介する。

「ドンバス」(セルゲイ・ロズニツァ)

「ドンバス」(セルゲイ・ロズニツァ)を見た。この映画は2014年に親ロシア派勢力による独立宣言を利用して、ウクライナ東部のドンバス地方に侵攻したロシア軍の支配実態を描いた劇映画だ。そこでは、クライシスアクターと呼ばれる俳優たちが演技を行い、フェイクニュースが作られている。さらには、医師が支援物資を横取りしようしたり、警察が新政府への協力というそをついて市民から資産を巻き上げようとしていたりしている。一方、国境では両国による砲撃の応酬が続いていた。映画の中で「親ナチ」とされた老いた兵士が、収容先に移送される前に街角に晒される。若者から始まり、一般市民、孫を連れた老婦人までが兵士に「リンチ」を加える。現在のウクライナ戦争の実態がこの映画で先取りされて描かれていると感じた。セルゲイ・ロズニツァはベラルーシ生まれで、ソ連時代にロシアで映画を学ぶ。その後、ウクライナに移住し、映画制作を行う。現在はドイツに移住し、活動している。日本では昨年頃からロズニツァの「国葬」などのドキュメンタリー作品が「群衆」三部作として公開された。残念ながらこの情報を知った時には、もう公開が終わっていて、見ていない。「ドンバス」が公開されたことにより、セルゲイ・ロズニツァの作品が見られることになると思う。

「アトランティス」(ヴァレンチン・ヴァジャノヴィチ)

この作品もウクライナ映画である。先に公開されたセルゲイ・ロズニツァの「ドンバス」に続いてヴァレンチン・ヴァジャノヴィチの「アトランティス」が公開されたので見た。(同監督

の「リフレクション」も続けて公開される。)「アトランティス」は2025年のウクライナ東部が舞台で、ロシアとの10年に及ぶ戦争によってあらゆる街が廃墟と化している。映画はロシアとの戦争が終わった近未来という設定で作られている。場所はドンバスであり、最近までよく報道されたあのマリウポリ製鉄所で働くセルヒー(アンドリュー・ルイマルーク)が主人公で、その心の荒廃(PTSD)と救いを描く。実に鮮烈な映像だった。

「リフレクション」(ヴァレンチン・ヴァジャノヴィチ)

続けて「リフレクション」(ヴァレンチン・ヴァジャノヴィチ)を見た。「リフレクション」はウクライナでドンバス紛争が始まった2014年が背景だ。「ドンバス」(セルゲイ・ロズニツァ)と同時期のウクライナ東部のロシア支配地域が舞台だ。外科医のセルヒー(ロマン・ルーツキー)が主人公で、彼は東部戦線で人民共和国側(ロシア側)の捕虜となり、拷問などの悪夢のような体験をする。そこにセルヒーの友人のアンドリュー(アンドリー・ルイマルーク)が連行されて来て、さらに悲惨な経験をする。この映画もそのPTSDが話の核となっている。

ウクライナ戦争を背景とする映画を見ることによって、ウクライナ戦争が人々に与えた深刻な影響を感じることが出来た。機会があればウクライナ戦争の現場から発信されるこれらの映画を見られるとよいと思う。